

久留島浩・高木博志・高橋一樹編

『文人世界の光芒』と古都奈良

——大和の生き字引・水木要太郎——

本書は、明治二〇年代から昭和一〇年代まで奈良県内の教員を歴任し、大和地方の「文化」にかかわるものを幅広く収集した水木要太郎（一八六五—一九三八）のコレクション（水木コレクション）を主な対象とした研究論文集であり、水木コレクションの主たる所蔵館である国立歴史民俗博物館でなされた共同研究の成果がまとめられたものである。構成としては、「総論」で本書のテーマや各論の内容が紹介された後、第一部「近代奈良と水木要太郎」に六本、第二部「文人世界とコレクター」に三本、第三部「水木コレクション」に六本の計十五本の論考が収められている。なるほど、「学際的な共同研究の成果」（三頁）というだけあり、内容は多岐に富んでおり、個々の指摘にも傾聴すべき点が多い。紙幅の都合上、各論考を具体的に紹介するだけの余裕はないが、全体を通じて本書の特色

として、評者の感じた点を三点ばかり、挙げておきたい。

まず、一点目は、「学際的な共同研究の成果」（三頁）という編者らの言葉に集約されている。「学際的」という言葉は巻にあふれているが、その内実としては寄せ集めの論集であることも少なくない中にある。本書は、水木要太郎ないし水木コレクションという確固たる核をもとにした共同研究であることもあり、水木要太郎、水木コレクションから何をとらえようとするかという各分野、各研究者のスタンスが、ときには緊張感を持って随所に表現されている。

たとえば、近世の和歌文化に関する研究と、近代の修学旅行を題材とした学知をめぐる研究が一書に収められることは、普通ないだろう。しかし、そういう幅広くこそ、水木要太郎という人、そして水木コレクションであるのであり、本書の全体を通じて、そのことを表現しているかのようである。

もちろん、本書の広がりや水木要太郎、水木コレクションのすべてを覆うわけではない。実際、巻末の研究会活動の軌跡には、本書に掲載されていない研究報告も非常に

多い。また、論考の中には、水木から出発しているものの、最終的には水木の枠におさまりきらない問題群を扱うものもある。

このような射程の広がり方も、「学際的な共同研究」が、実質的な意味で、成功したからこそなのだろう。

この「広がり」にも関連するが、二点目として、本書は水木を深く追究するという論考と同時に、水木を相対化する視点を色濃くもつ論考が多い点がある。端的なのは、崎山卯左衛門や保井芳太郎、高田十郎、山田孝雄、戸川残花、山本不二男といった、いろいろな点で水木と重なりつつも、異なる動きをした人物が取り上げられていることであり、それらの人物を通して水木が照射され、さらに近代もしくは奈良といった問題が論じられている。「水木要太郎」という名前が本書の副題に充てられ、主題には「文人世界」という語が用いられるのも、本書は決して水木論ではないという意思の表れと、勝手ながら憶測しておきたい。

三点目は、近代奈良へのまなざしである。近代において「古都奈良」という位置づけをどのように確立、規定、表現しようとしたか。本書を通じて、水木の営為と地域ア

があつた方がよいかとも思う。そのような些細な「ないものねだり」を付して、稿を閉じたい。

(A5判 五〇四頁 二〇〇九年一〇月)

思文閣出版 八一九〇円)

(上杉和央 京都府立大学准教授)

受 贈 誌

(二〇一〇年二月三日)
(二〇一〇年三月二六日)

鹿児島大学法文学部紀要(鹿児島大学法文学部)

学部) 人文科学論集六九

鹿児島大学法文学部紀要(鹿児島大学法文学部)

学部) 人文科学論集七〇

人文地理(人文地理学会) 六一—六

経済研究(一橋大学経済研究所) 六一—一

日本史研究(日本史研究会) 五七〇

奈良史学(奈良大学史学会) 二七(丸山幸彦先生退職記念号)

信濃(信濃史学会) 六一—二

立命館文学(立命館大学人文学会) 六一四

経済論集(ソウル大学校経済研究所) 四八

一四

史迹と美術(史迹美術同攻会) 八〇—二

京都橘大学研究紀要(京都橘大学) 三六

中国女性史研究(中国女性史研究会) 一九

国家學會雜誌(国家学会事務所) 二二—一

一・二

日本歴史(日本歴史学編集) 七四—二

日本民俗学(日本民俗学会) 二五九

日本民俗学(日本民俗学会) 二五九

介 紹

イデntyティ形成との関連が示されている。そこには水木の活動した時期も大いにかかわっており、その前後の人物が交互に登場することで、特徴がより鮮明となる。それと同時に、本書では中央である東京(や京都)と地方である奈良、という「中央—地方」図式が多用され、その中で「古都奈良」の醸成が論じられる。他の地域の議論がほとんどなく、奈良の個性が「中央」との対比でしか表現できていない(「中央」についての議論もわずかである)ために、この構図の妥当性は判断しかねるが、一書を貫く構図が明確であるという点において、非常に有効に機能していると思われる。

再度述べるならば、本書は水木要太郎、そして水木コレクションを核、そして出発点とした「学際的な共同研究の成果」である。そのコレクションについては『収集家一〇〇年の軌跡』(一九九八年、歴博企画展図録)や『水木家資料目録』(二〇〇三年)を参照するように指示されており、本書ではほとんど触れられない。もちろん、指示に従えば済む話であるが、本書で水木を知る読者もいると思うと、もう少し解説